

あとがき

現場で学ぶ授業改善のすすめ

「アクティブラーニング」や「主体的・対話的で深い学びの実現」につながる書籍は100種類以上も出版されていると言われていています。新聞・テレビでも頻繁に取り上げられ、授業改善をテーマにした学園ドラマも放送されました。教員を対象としたイベントも各地で繰り広げられ、講演、授業体験、調査研究報告、パネルディスカッション、そして懇親会も華やかに繰り広げられているようです。このあたりの情報だけを見ていると、授業改善はものすごい勢いで拡大・浸透しているように見えます。

しかし、年間100回前後のペースで現場に行き、研修会前後に現場の先生たちと交流していると、そうとも言えないことを私は感じます。「まだ何も始めていない」「何をやってよいかわからない」という声もあれば、本文で取り上げたように「成績が下がった」「教科書が終わらない」「準備が大変」「子どもたちや保護者から文句が出た」などで「やめました」の声も聞きます。

そんな中で私が気になり始めたのは、「学校の外に研修に行かないと、よい授業はできない」と思っている人が案外多いということです。私はそうは思っていません。現場で学ぶ、仲間とともに学ぶ、仕事そのものから学ぶ（OJT）ことのほうがメリットは大きいと感じています。

その理由は、①時間とお金が節約できる、②現場を離れないから仲間・子ども・保護者から信頼される、③仲間の授業は同じ学校の子ども相手だから効果的な方法はすぐに使える、④仲間の授業なら「普段の授業」を見学できる、⑤仲間や自分の授業に対して校内の子どもたちからフィードバックを得ることができる、⑥現場の仲間とやれば相談したりデータを共有したりすることがすぐにできる、などです。

私が自分の授業改善を始めた10年前には、イベントはほとんどありませんでした。講師依頼は少しありましたが、自習を出すと進度が遅れるのでほとんどお断りしていました。その代わりに、私の授業の見学はいつでもOKにしていました。そして、授業研究委員会を中心とした仲間との学びだけで、自分たちの授業のレベルアップは十分に実現できていました。

働き方改革が叫ばれている時期でもあります。日常業務を減らしながら授業改善するには、業務そのものをトレーニングにするという考え方も必要です。この本で紹介したワークシートは担任業務の負担を軽くし、効果を上げ、さらに教科授業の腕を磨くことができます。

私は本書でも、高校の教員だったときに同僚にワークシートをシェアしていたとき

と同じ気持ちで、皆さんにシェアしています。お気軽にお使いください。役に立つと感じたら隣の席のお仲間にも、シェアしてください。現場で学びながら、無理をしないで授業改善を続けていきましょう。ご意見ご質問、大歓迎です。私のホームページの「お問い合わせ」からどうぞ。

私の担任、橋本素子先生へのお礼

この本は、私の高校2年生のときの担任だった橋本素子先生へのお礼の気持ちを込めて書きました。私は北海道帯広市の道立高校に入学したのですが、2年生になるときに父親の転勤により、道立札幌南高校に転校しました。入学後の私の成績から考えると、この編入試験合格は一家転住がゆえの「お情け合格」だったのだと思います。

北海道トップの高校に2年生から転校した私は、不安で仕方ありませんでした。2年6組に入ることになりお会いした担任の先生は、当時26歳の女性の先生。教員として3年目の先生でした。その橋本先生の最初のお話を、50年たった今でも鮮明に覚えています。

橋本先生は、「私は担任と言ってもあまり経験もないので、偉そうなことを言うことはできません。ただ、これだけを私の信条としてやっていきたいと思います」と言いながら、板書された言葉は「共に喜び、共に悲しむ」でした。そして、本当に私たちと一緒に喜び、怒り、悲しみ、泣く先生でした。48人のうち女子は11名。大多数のやんちゃな男子は「素子さん、素子さん」と友達のように呼びかけ、授業はサボる、悪さはする…の毎日でした。精神年齢が上の女子たちに「あんたたちがバカなことをするから、また素子さんが泣いているじゃない!」とよく叱られていました。

高校卒業後に父親は再び転勤、私は埼玉大学に進学。同窓会にも行かず、橋本先生ともクラスメートとも音信不通になっていました。50年近くを経た2017年になって、ひょんなことから私が札幌に行く日に合わせて橋本先生や2年6組の仲間と会い、ミニ同窓会を開きました。その次の機会には橋本先生のご自宅に遊びに行き、一緒に高校にも遊びに行きました。

この再会で気づいたのは、私の「担任像の原点」は橋本先生だったということです。「共に喜び、共に悲しむ」は、まさに「対等な人間として生徒と接する」ということです。50年ぶりに再会した旧友が「小林、卒業できたんだ?!」と言うほど、成績はほぼ最下位だった私ですが、先生は私をバカにすることなく丁寧に接してくれました。橋本先生の在職期間はわずか数年間。その時期に巡り合えたことは幸運でした。

橋本先生、おかげさまで、何とか私は生きています。私は橋本先生のような温かく優しい担任にはついになれませんでしたから、これからは橋本先生のような担任が増えることを願い、この本を書きました。遅ればせながら、50年前に先生の手をわずらわせた「落ちこぼれ生徒」からのお礼です。いつまでもお元気でお過ごしください。